琉球大学学術リポジトリ

[追悼文]追悼 当山清善先生を悼む

メタデータ	言語: 出版者: 南方資源利用技術研究会 公開日: 2019-08-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平良, 東紀, Taira, Toki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017609

追　悼

当山清善先生を悼む

琉球大学農学部　**平良　東紀**

本研究会の第2代会長(1987年～1993年)であった当山清善先生が、2014年11月15日に肺腺癌のため永眠されました（享年80歳)。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

当山清善先生は、昭和9年10月20日に沖縄県に生まれ、昭和33年3月に鹿児島大学農学部農芸化学科を卒業し、昭和35年3月に京都大学大学院農学研究科修士課程農芸化学専攻を修了され、同年5月に琉球政府経済局（技手）に採用されました。昭和39年7月に琉球大学農家政工学部講師（農芸化学科）に移り、昭和42年4月に琉球大学農学部助教授、昭和47年4月に37才という若さで琉球大学農学部教授に就任し（写真1、2)、昭和47年7月に京都大学で農学博士を取得なされました。以後、琉球大学学生部長、農学部附属農場長併任、農学部長など数々の要職を務め、平成12年3月に停年退職されるまで、教育・研究のみならず大学・学部の運営にも務め、平成12年4月に琉球大学名誉教授になられました。

応用微生物学の教育・研究においては、主にアミノ酸代謝に関与するビタミンB6酵素の反応機構の解明に貢献なされました。生体内で重要な働きを示すアミノ酸の一種タウリン（肝機能・神経伝達に関与。現在、多くの栄養ドリンク剤に含有）とω－アミノ酸（主要なビタミンの一部）の代謝に関与する新規酵素（ピルビン酸トランスアミナーゼ）を世界に先駆けて発見し、その反応機構を解明なされています。その結果、本酵素には国際酵素番号（EC 2.6.1.55）が付与・登録されました。本酵素はモデルタンパク質としてスペースシャトルに載せられ、宇宙での科学実験材料として提供されるなど、当山先生の行った研究成果は、当該分野において国際的にも多大な貢献をしています。

また、当山先生はバイオマスエネルギー開発の教育・研究において、未利用植物資源の微生物酵素による分解と発酵利用の研究を行い、省エネルギーによるバイオエタノール生産技術の確立に貢献されています。サトウキビの糖蜜を搾った後の残渣（バガス）の微生物酵素利用による分解技術、農産廃棄物

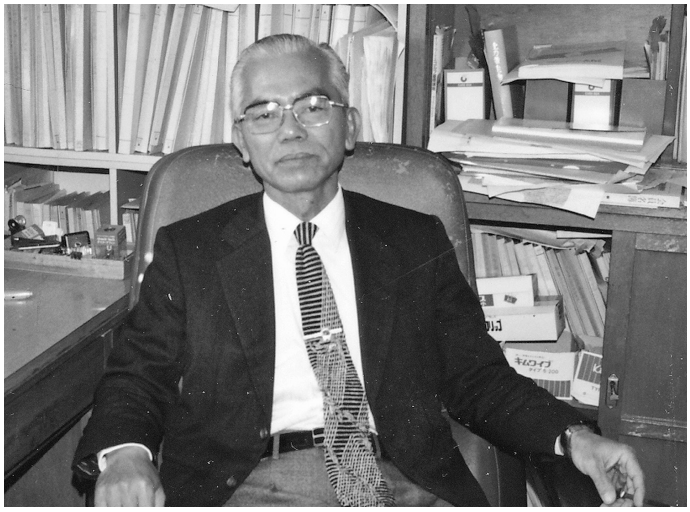

写真1　研究室にて

写真2　学生達と海辺で（1978年頃）
前列中央が当山清善先生，右隣が与那覇和雄先生，右最後列が故石原昌信先生

のメタン発酵技術、甘藷イモからのバイオエタノール製造技術を次々と確立し、それらを組み合わせた省エネルギーバイオ燃料生産プロセスを開発なされました。これらの成果は、現在世界中で行われているバイオ燃料生産技術の基礎となっています。さらには、沖縄県の伝統的な蒸留酒である泡盛の教育・研究において、泡盛製造に用いられる黒麹菌の基礎的な研究を行うとともに新たな製法を提案し、泡盛の製造技術の発展にも貢献なされました。

学内においては、学生部長として首里キャンパスからの大学キャンパス移転直後の学生の福利・厚生環境（学寮の建設等）、学習環境の整備・充実に務められました。農学部附属農場長として亜熱帯地域における大学農場の整備・充実にも尽力されました。また、農学部長として学部・学科の改組・再編や学内共同研究施設遺伝子実験施設の設置に向けての対応、鹿児島大学大学院連合農学研究科（博士課程）への参画対応にも尽力され実現させました。

学外においては、南方資源利用技術研究会会長（第2代、1987年～1993年）、沖縄県技術アドバイザー、沖縄地域におけるバイオインダストリー振興対策調査委員会委員長、沖縄県優良県産品選定審査会会長および沖縄県地方酒類審議会会長等を歴任され、沖縄県の特性を活かした生物産業の振興に貢献されました。

以上のように、当山先生は、大学における教育・研究のみならず、地域産業の振興・発展ならびに人材育成に尽力なされ、その顕著な功績が認められて、平成25年春の叙勲において瑞宝中綬章を受章なされました（写真3）。

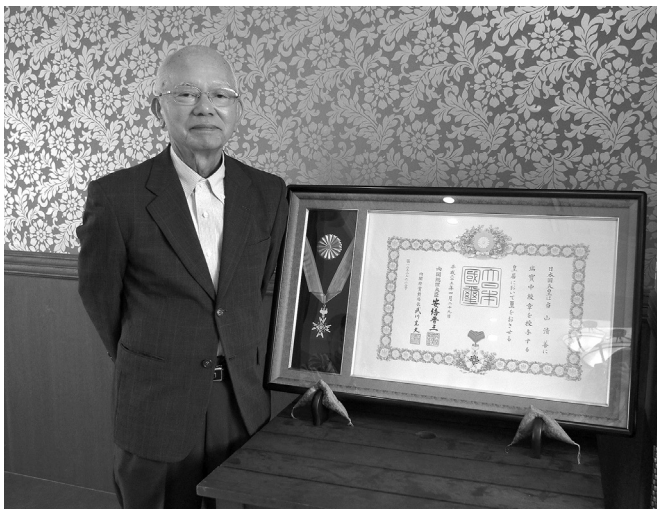

写真3　当山清善先生（右は瑞宝中綬章の勲章と賞状）

私は、1991年に改組された農学部生物資源科学科の一期生として入学しました。それまでの5学科（農学科、農芸化学科、農業工学科、畜産学科、林学科）を3学科（生物生産学科、生産環境学科、生物資源科学科）に改組するという大変革に、当時農学部長だった当山先生は大変ご苦労なされたようです。当山先生や与那覇和雄先生の講義を受け、遺伝子工学および酵素科学を志し、当山先生の主宰する応用微生物学研究室の門を叩きました。応用微生物学研究室では、当山先生と共に故石原昌信先生のご指導の下、酵素科学に関する多くのことを学びました。その後、九州大学大学院農学研究科の修士課程で蛋白質工学を学び、まだ博士課程の1年生だった私を琉球大学応用微生物学研究室の助手として採用していただきました。一年間だけでしたが、大学の教員として大事な事を当山先生の下で沢山学ばせていただきました。「大学人にとって大事な事は、教育と研究そして組織運営」であり「組織運営は若い君にとっては面倒なことだと思うかもしれないが、大学人は自らの環境を自ら作らないと、生きていけない。」と良く言っておられました。そうおっしゃいながらも、若い私には「とにかく今は好きなように精一杯『基礎研究』をやりなさい」と言って下さいました。本研究会への入会も、雑用が増えるから入会をなるべく遅らせるようにご配慮していただきました。会議が無い平日は、ほぼ毎日学外に一緒にお昼を食べに行っていたのですが、中でも行く機会が多かったのは「みどり屋食堂」とゴルフレンジの食堂でした（ゴルフが大変お好きだったのは皆さんご存じかと思います）。行く先々で、当山先生は周りの方に明るく挨拶をして、周りの方もまた親しく挨拶を返してくれていたのは、当山先生の明るく温かいご人望なのだと思いました。エレベーターで留学生に会えば、英語で話しかけ、何か困ったことは無いかと尋ねておられました。周りへの気配りを忘れないということも、当山先生から学んだことの1つです。また、「大事な会議や交渉の際には、必ず詳細にメモを取りなさい」と言われました。「そうすれば、本当に大事な場面で、記録に基づき、時系列で、しかも論理的に話し合いができる。そうなれば、無用な言い争いを避け、建設的な話し合いができるはずだ。」と教えていただきました。このように、当山先生は基本に忠実に正論で進めることによって、

写真 4　当山清善先生瑞宝中綬章受章祝賀会（2013 年 9 月 15 日）
前から 2 列目中央が当山先生，向かって左が安田正昭先生，右が石原恵美子様（故石原昌信先生の奥様）

数々の難しい交渉事を成功させて来たのだと思います。当山先生には､琉球大学を退職された後も､様々な場所・場面で色々なことを教わりました。

まだまだ、様々なことを当山先生から学びたかったのですが、昨年 11 月に急逝されました。当山先生は昨年 8 月に入院なされ、その際の検査でガンであることが分かったそうです。奥様の百合子さんによると、ご結婚後初めての病気での入院だったとのことです。入院当初はお元気だったそうですが、ガンの進行が思ったよりも早く、入院から 3 ヶ月経った昨日の 11 月に、ご家族に見守られながら安らかに永眠なさいました。抗がん剤治療を途中で止めていたおかげで、末期はとても穏やかであったとのことです。また、入院中の 10 月に 80 歳の誕生日をご家族とともに迎えられています。病気のことも、入院のことも近い親戚以外の方には伝えないようにしていたようで、私も、当山先生のご子息からの電話でご一報いただいた時、初めて病気であった事を知りました。当山先生には、もっとお聞きしたいこと、お話ししたいことがまだまだ沢山あり、それをしなかったことを大変後悔しました。

ただ、唯一良かったと思ったことは、平成 25 年春に当山先生が瑞宝中綬章を受章され、その祝賀会を同年 9 月に応用微生物学研究室 OB の方々と出来たことです。当山先生をお祝いしようと 77 名もの OB の方々が集まり、大変盛会となりました。上は農芸化学科の 3 期生（1969 年卒業）から下は現役の学生さんまで、年齢差 45 才という大変幅広い世代の集まりとなりました。来られなかった OB の方々からも多くのお祝いのメッセージを手紙やメールでいただきました。開会・乾杯の挨拶に続き、各 OB の近況・自己紹介を行いました。当時の懐かしい写真とともに、当山先生へのお祝いの言葉と、当時の思い出、近況など、皆さん短い時間で話し足りない様子でした。次ぎに、当山先生のご功績を紹介した後、OB 会の方から記念品の贈呈を行いました。その後、当山先生からご挨拶をいただきました。受章への経緯、OB の皆さんへの感謝、OB の皆さんのご活躍の喜び、そしてこれからも OB 会を続け、この繋がりを力に変えて行きましょうという旨のお言葉をいただきました。しゃべり口調は現役時代そのままの当山節で、大変お元気な様子でした。最後に記念撮影を行いました（写真 4）。参加された OB の方々は皆、当山先生が大変お元気で、まだまだ長く我々を導いてくれることを信じていました。

それから約 1 年経って入院され、数ヶ月の後、お亡くなりになりました。あれだけ元気そうだったのに、私を含め皆さん驚かれたと思います。しかし、当山先生が繋いでくれた人の繋がりは今も残っています。私自身が研究室の OB の方々と初対面であったとしても、私が同じ当山研究室の後輩であるというだけで、大変良くしてくれます。実際に多くの研究室 OB の方々との繋がりが、共同研究など現在の仕事に直接結びついています。私自身も当山先生が繋いでくれたものを後輩に繋いで行きたいと思います。最後に、いまでも我々後輩達を温かく見守ってくれているであろう当山清善先生に、心から哀悼の意を捧げます。